論　文

城郭研究から見た天正11年米ノ山合戦

岡 寺　　良

はじめに

戦国時代末期の太宰府は、中国地方の大内氏滅亡後、毛利氏を退けた豊後の大友氏（大友義鎮（宗麟））が領有するところとなり、宝満城・岩屋城に城督として高橋鑑種と次いで高橋鎮種（紹運）を置き、立花城（福岡県新宮町ほか）などと共に大友氏の筑前支配の拠点とした。岩屋城や宝満城については天正14年（1586）７月の薩摩島津勢による合戦が有名であり、文献史や城郭研究の分野でも研究は進んでいるものの（川添2003・中西1998・岡寺2006,2007・新名2017・木島2022）、それ以外の事績についての研究は乏しい。

図１　かつての米ノ山（飯塚市教育委員会2013から転載）

本稿は、太宰府市と飯塚市の境目近くにある米ノ山城（福岡県飯塚市）とその周辺に点在する中世城館に注目し、それらを検討することによって天正11年に高橋方と秋月方との間で起こった米ノ山城を巡る合戦（米ノ山合戦）の在り方を城郭研究の視点から考察するものである。

１．天正11年米ノ山合戦について

（１）大友方の文書から見た合戦の推移

永禄12年（1569）に中国地方の毛利氏が九州北部から撤退した後、太宰府をはじめとする筑前西部地域は、前述のように豊後大友氏が安定的に支配していたが、天正６年（1578）の日向での高城・耳川合戦において、大友氏が島津氏に大敗したことで、大友氏の九州各地の支配が揺るぎ始めた。筑前の大友氏領域である御笠郡、糟屋郡、那珂郡、志摩郡も、周囲の国衆である秋月種実や筑紫広門、宗像氏貞、原田隆種（了栄）、そして龍造寺隆信らによって徐々に侵食され始めていた。天正11年１～３月には筑紫広門が岩屋城を焼き（豊前覚書）、太宰府近辺に頻繁に出没し（筑後柳河立花家譜・立花記）、また原田方が那珂郡岩門庄久邊野（福岡県那珂川市）に砦を築いたことを受け、同年４月16日には大友方の立花城の戸次道雪と合戦に及び（立花記・薦野家譜）、さらには同月23日には、宗像許斐城（福岡県宗像市・福津市）を高橋紹運と戸次道雪が攻めるも、守城側の宗像氏貞に撃退されている。

そのような状況に鑑み、高橋紹運が秋月氏の押さえとして構築したのが米ノ山城であった。秋月氏は、天文・永禄期には毛利方に与し、大友氏の支配を良しとしない国衆で、筑前秋月（福岡県朝倉市）の地を本拠とし、反大友方として毛利氏をはじめ龍造寺氏や島津氏と関係を深くしながら支配領域を広げようとしており、筑前の大友方にとっては厄介な存在でもあった。

そして天正11年10月に勃発したのが、米ノ山合戦である。秋月方が城を攻略したものの、紹運が即日のうちに奪還した。その様子は、『伝習館文庫柳河藩政史料』の「梅岳君御軍功実録」には、その時の高木長門入道に宛てた立花統虎（宗茂）と戸次道雪の連署状の写しとして、次のように採

録されている(1)。

追而、前刻至米山秋月より忍を入、焼崩候而、即時ニ秋月衆二千計罷出、彼山可取誘覚悟與依見候、紹運公従山之手被懸付防戦候、未之下刻、紹運公自身ニ被取鑓被突懸候條、秋月之者とも一鑓も不合逃崩候間、一里程追討候て、秋月家中無餘義者共、及七十人被討捕、其外大負被仕付、被得大利候條、先以外聞実儀此事ニ候、此方江者已剋註進到来候間、親類家中之者とも不残指遣し、親子之事ハ、北目江卒度無心元事候條、当城江相加候、此方衆ニハ森下中務少輔、今程宇美村江致在郷候間、彼之方角之もの共相進、二三百程能比ニ懸付候條、少丶致分捕候由ニ候、其外衆ハ合戦終て被懸付之由申候、遠方之義ニ候間、推量之前ニ候、今日者何れも可打入之由ニ候、未夕委敷事ハ不相聞候、此由宗歴老、紹白江も、卒度噂可被申、其方淵底如存知、従其元秋月ニ懼させられ候様ニ者、紹運・統虎家中之者共者、曽て不存候、何時も少丶罷出候ハ丶、紹運・統虎両家之者とも、一手宛ニ而も出可申候、此一戦ニ者此方江者手負二三人有之由ニ候、一人も戦死之者無之候條、一段珍重候、礑と従貴国ハ被御覧捨候間、何様人数不相透内をとの心懸迄ニ候、必ニ三日中山東何方なり共、今越山可見合覚悟候、呉丶船何とか以才覚、早丶帰国肝要候、恐々謹言、

天正十一年
十月三日　　統虎公 道雪公 両御判
名当無之

上書
「　高木長門入道殿　　道雪　」

これによると、10月２日に、秋月方の忍びの者が、城内に潜入して放火し、それに乗じて秋月方の兵二千が出陣したが、高橋紹運が山の手より駆けつけて、奮戦して攻撃を防いだため、秋月の兵は一戦も交えることなく退却、紹運は一里も追いかけ、70名ほどを討ち取った。一方で高橋方は二、三人が負傷したくらいで、戦死者はなかった、という戦いの内容であったとする。

さらに、同じく『伝習館文庫柳河藩政史料』には、戸次道雪・立花統虎から吉田右京亮に対しても、次のような感状が発給されている。

今度至米山敵致候處、最前被懸付候故、郎従藤村市之丞分捕之由ニ候、高名感悦無極候、必以時分可賀之候、恐々謹言、

（天正十一年）
十月十日　　道雪公御判 統虎公御判
吉田右（建正）京亮殿

また、一次史料ではないが、『高橋記』には「十八　米山従秋月忍取事」として、次のように記載されている(2)。

同年末、秋月ノ押トシテ、寳満ノ東米山ヲ要害に誘へ、少々御人數ヲ被籠置候所ニ、則年十月二日、秋月ヨリ謀略ヲ以忍ヲ入切捕候間、寳満ヨリ同日時刻ヲ不移、駆ケ付攻還ス、秋月衆モ暫ク防戦フト云共、餘リニツヨク撮立ラレ、終ニ敗軍仕ル、然ヲ二里程追討シ、首數三百餘討捕、則時ニ本懐ヲ遂ラルヽ、御威勢ノ程コソユヽシケレ、

最初の文書に比べて数字の誇張などが認められるものの、基本的な合戦の推移は同じである。

（２）イエズス会年報から見た米ノ山合戦

大友方の文書以外に、米ノ山合戦を記したと考えられるものに、『イエズス會日本年報』がある。

その附録一の「1584年１月20日（天正11年12月18日）付、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスよりインド管区長パードレ・アレツサンドロ・バリニヤノに贈りし書翰」には次のように記している(3)。

（上略）筑前國において豊後の領するヒマ（賓満）Fima及び立花Tachibanaの城の守将（高橋紹運と戸次道雪）は、豊後の王に叛いた秋月に対して謀略を用ひ、人を遣はして、秋月は大なる領主である、彼等は多數の敵の間に在つて、二城を守ることができないので、豊後を叛き、かれと合體せんことを希望すると言はせた、この使者はまたこれを信ぜしむるに足る多くの理由を挙げた、五回人を遣はしたが、秋月は少しも聞入れなかつた、最後に第六回目に保證として秋月が非常に希望した一城の所領を提供し、その城を焼くにより、火を見て人を遣はしてこれを占領するやう申出た、秋月が慾のためこれを承知したので、彼等は直に財産と人とを城より出し、これに火を掛けた、秋月は城の燃え始むるを見て、これを占領するため千人を遣はしたが、豊後の兵一萬餘は十分の準備をなして待受け居り、彼等を囲んで千人のうち百餘人を殺した、秋月は大いに憤つたが、今復讐をなす途がない、（中略）ほかに尊師に通信すべきこともあるが、ほとんど一般書翰に認めてある故、今この書翰に述べず、尊師が犠牲ならびに祈祷において予を推薦されんことを願ふ

一五八四年一月二十日　長崎より、

この書簡では、秋月が非常に希望し、かつ合戦が起こった城がどこであるかは書いていないものの、最初に火がかけられて秋月方が城内に入ろうとしたところ、大友方に逆襲にあったことなど、戦いの推移が米ノ山合戦に類似することや、さらには書簡の年月日が、天正11年12月18日付で、米の山合戦の10月２日から２ヶ月半しか経過しておらず、この時期、高橋方と秋月方の合戦が他に見当たらないため、「秋月の非常に希望した城」は米ノ山城で、起こった合戦は米ノ山合戦と見て間違いない。

ただ、合戦の発端が大友方の文書と全く異なっており、従来は秋月方の謀略として起こった戦いとされているが、この書簡では、欺かれたのは秋月方で、戦いを誘発したのは高橋方である。秋月方が謀略にはめられ、高橋方の突然の逆襲で大敗したこととなっており、戦いの評価が全く異なっている。ただ、秋月方が戦うことなく敗退したことや、紹運が即応して防戦（本当は攻撃）したことの不自然さや、中立的な立場のイエズス会の見解と考えれば、実際のところは、イエズス会の書簡のいう通り、高橋方の欺瞞作戦が功を奏したのではなかろうか。

２．米ノ山城と周辺城館

前章にて米ノ山合戦の概要をみたが、実際に戦闘が行われた米ノ山城、さらにはその周辺の城館はどのようになっているのか、その分布を見たのち、それぞれの城の概要を検討する。

（１）米ノ山城周辺の城館（図２）

米ノ山城は、高橋方でありながら、御笠郡ではなく、郡境のやや東に位置している。近隣には、向山城、茶臼山城、高石山城、扇山城、一ノ谷城、桑木城など、狭い範囲ながら数多くの城が築かれている。この地の城館構造については、近年までほぼ不明であったが、2012～13年に実施された福岡県教育委員会による調査（福岡県教育委員会2014）および、筆者の調査（岡寺2023）により、その位置と縄張り構造について、詳細に判明している。

（２）米ノ山城の構造（図３）

米ノ山城は、太宰府の御笠郡から筑豊地方の穂波郡へ抜ける峠道の一つ、米ノ山越え（米ノ山峠）を過ぎ、峠の東に聳える米ノ山山頂（標高約420m）に位置していた。米ノ山は、飯塚側からは飯を盛っ

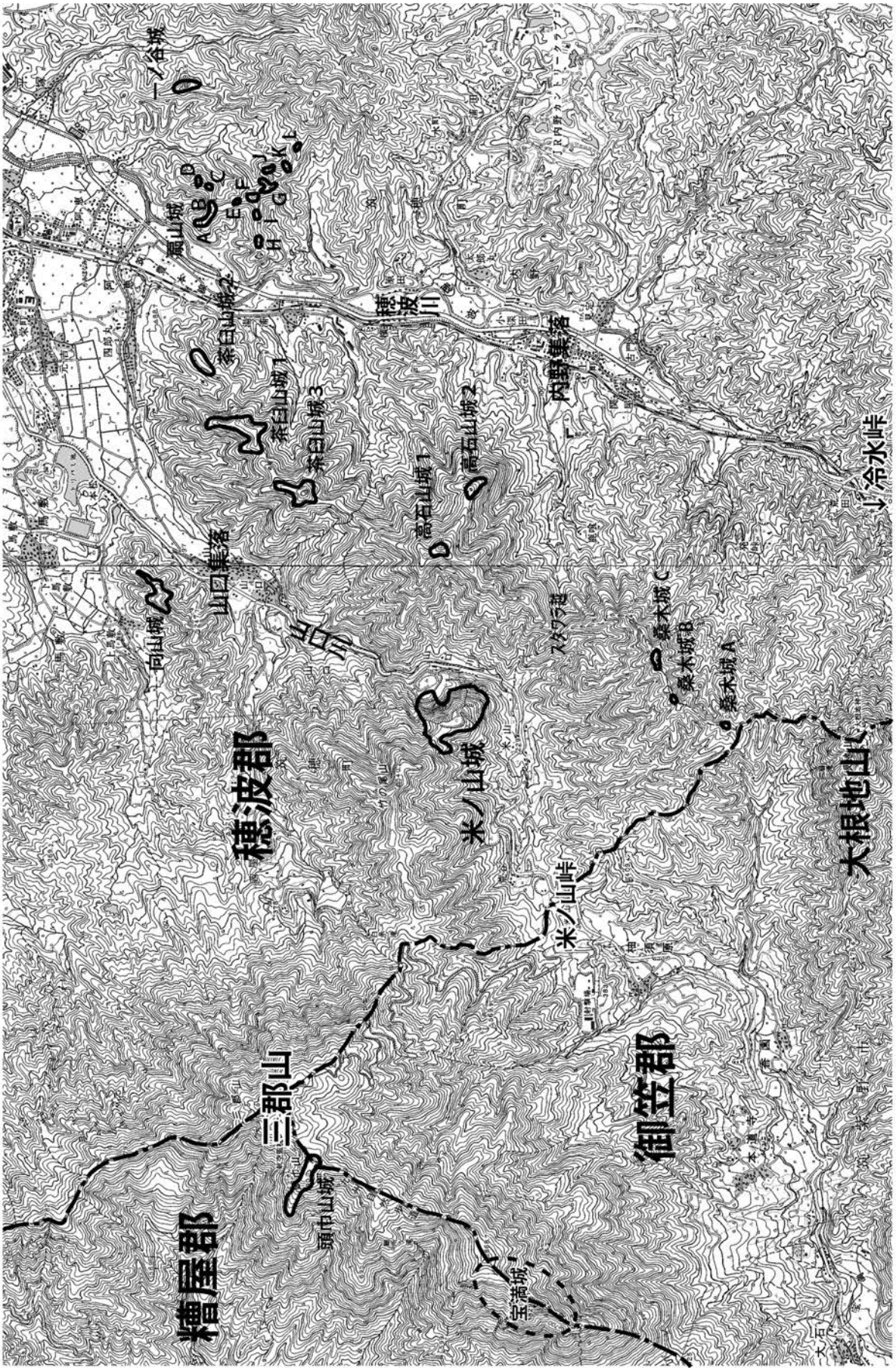

図２　米ノ山城及び周辺城館位置図(1/35,000)

たような半独立峰のように目立った存在であったが、昭和47～48年（1972～73）ころの採石によって、山頂一帯の曲輪群は削平され、さらにその後も採石が進んだため、発掘調査が２次にわたって行われ（筑穂町教育委員会1988、飯塚市教育委員会2013）、最終的には平成23年（2011）に完全に消滅した。

江戸時代の絵図や、昭和30年ころの地図、発掘調査の成果を総合すると、城の構造は次のようになる。城の主郭は米ノ山山頂に位置し、そこから北東側に延びる尾根上に曲輪群が階段状に展開する。一方、南側の尾根上は曲輪が細長く伸びて広い面積を有し、その下方に狭い曲輪が３段並ぶ。南側の尾根筋からは３本の支尾根が枝分かれしており、それぞれ１～２本の堀切によって防御がなされていた。一方で主郭の北西側、竹の尾山へと続く尾根はいったん山頂部より低くなり鞍部を形成し、その南側は谷となる。『筑前国続風土記附録』には「馬さしの谷」とあり、鞍部にある曲輪も、地元では「馬サシ」と呼ばれている。この鞍部には４本の堀切が設けられて城内を防御すると共に、その外側に「馬サシ」の曲輪を置いている。

図３　穂波郡山口村米山故城図（国立公文書館所蔵）

過去に行われた発掘調査では、主郭において石組み井戸と基壇状石組み各１基が検出され、遺物では、土器・陶磁器・石臼・鉄砲玉などが出土している。

城域全体の面積は、現在もう知ることは難しいが、旧地形図などから200～300m四方のそれなりに広い城域であったものと考えられ、堀切の防御面から考えると、南～西側に対する防御意識が高かったということができるだろう。

（３）周辺城館の構造

①茶臼山城（図４）

米ノ山城から山口川を挟んで東側には、大根地山から派生する丘陵が南北方向に連なっている。その稜線上には、北から茶臼山城、高石山城、桑木城の３城が所在する。

茶臼山城は、米ノ山の南を流れる山口川が穂波の盆地にちょうど開けた箇所の南側に位置する。城域は大きく３箇所に分かれているが、いずれも大根地山から派生する稜線上に位置し、いずれも完結した縄張り構造となっている。

３箇所に分かれた城域のうち、中央部（茶臼山城１）は標高287mの頂部を中心とし、稜線上に沿って、南北約350m、東西約150mの規模を有する。基本的には小規模な平坦面の造成と自然の平坦地形が連なり、要所に堀切を設けている。堀切は併せて７か所にも及ぶ。非常に長大だが造成の範囲は尾根筋頂部のみとなっており、全体的な造成量はさほどでもないようである。中央部から300mほど離れた北東部（茶臼山城２）は、稜線上に沿って200mほどの城域を有する。平坦面の平坦具

合はあまり明瞭ではないが、堀切は平坦面の間に併せて３箇所設けられている。中央部から300mほど離れた南西部（茶臼山城３）は標高357mの頂部を中心に南北約200m、東西約100mの城域を有するが、尾根上の自然地形が主体で、明瞭な平坦造成は数えるほどしか見られない。しかし、堀切は３箇所設けられており、これらの空間を防御する意図を見ることができる。

図４　茶臼山城縄張り図（左：１地点・中：２地点・右：３地点）（福岡県教育委員会2014）

江戸時代の絵図には、茶臼山城３地点は、「旧茶臼山」と記されており、茶臼山城の本体ではないが、城郭遺構としての認識はあったようである。

『筑前国続風土記』には「秋月の端城也」とあり、『筑前国続風土記附録』には「村民ハ矢臥山といふ。本丸の跡二畝余、二の丸跡一反余、三の丸跡二反はかりあり」と記される。本丸、二の丸、三の丸は、現地にて確認できた１～３地点に対応する可能性も考えられる。

②扇山城（図５）

山口川が合流する穂波川右岸に面した標高約170mの山稜部に位置する。江戸時代の絵図などから従来は東西約250m、南北約150mの範囲（Ａ～Ｄ地区）に城域が広がると考えられていたが（福岡県教育委員会2014）、江戸時代の絵図の記載を基にした2017年の福岡県教育委員会の調査によって、さらに広範に城域が拡大している（福岡県教育委員会2017）。

従来の城の範囲のさらに南側の尾根筋一帯にも、散在的に曲輪面が築かれている。その数は併せてＡ～Ｌの12地点にも上る。元々知られていたＡ―Ｂ地点の曲輪群の東端に堀切１本と、最も南東側に位置するＬ地点の堀切１本が構築される他は、基本的に小規模な平坦面群が集まった小曲輪群として構成される。それぞれの曲輪群の地区は、50～100mの自然地形を間に挟み、その分布は非常に散在的といえる。ただ、これらを併せると総延長１㎞を越える長大なものとなる。さらに堀切などの防御遺構がほとんどみられず、基本的に小規模な平坦面造成しか認められないのは、臨時的な兵の駐屯を意図したとみることができ、陣としての臨時築城による造成が大半だと考えられる。細長く陣を張るような形態を想定できるのではなかろうか。

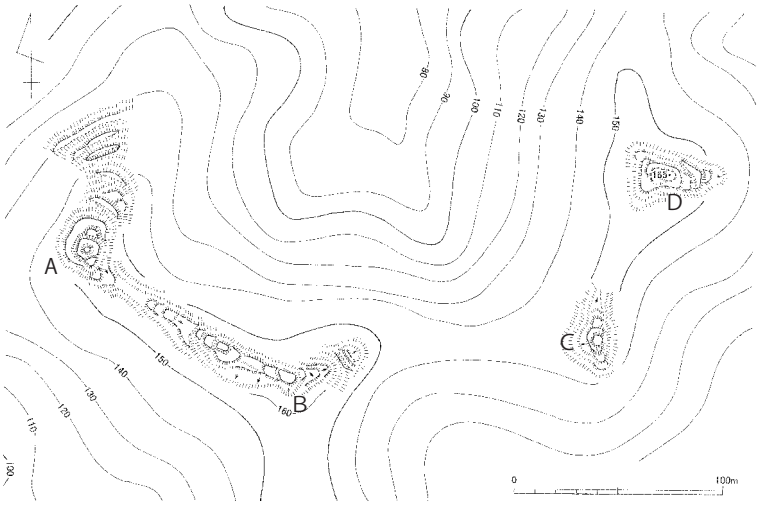

図６　一ノ谷城縄張り図
（福岡県教育委員会 2014）

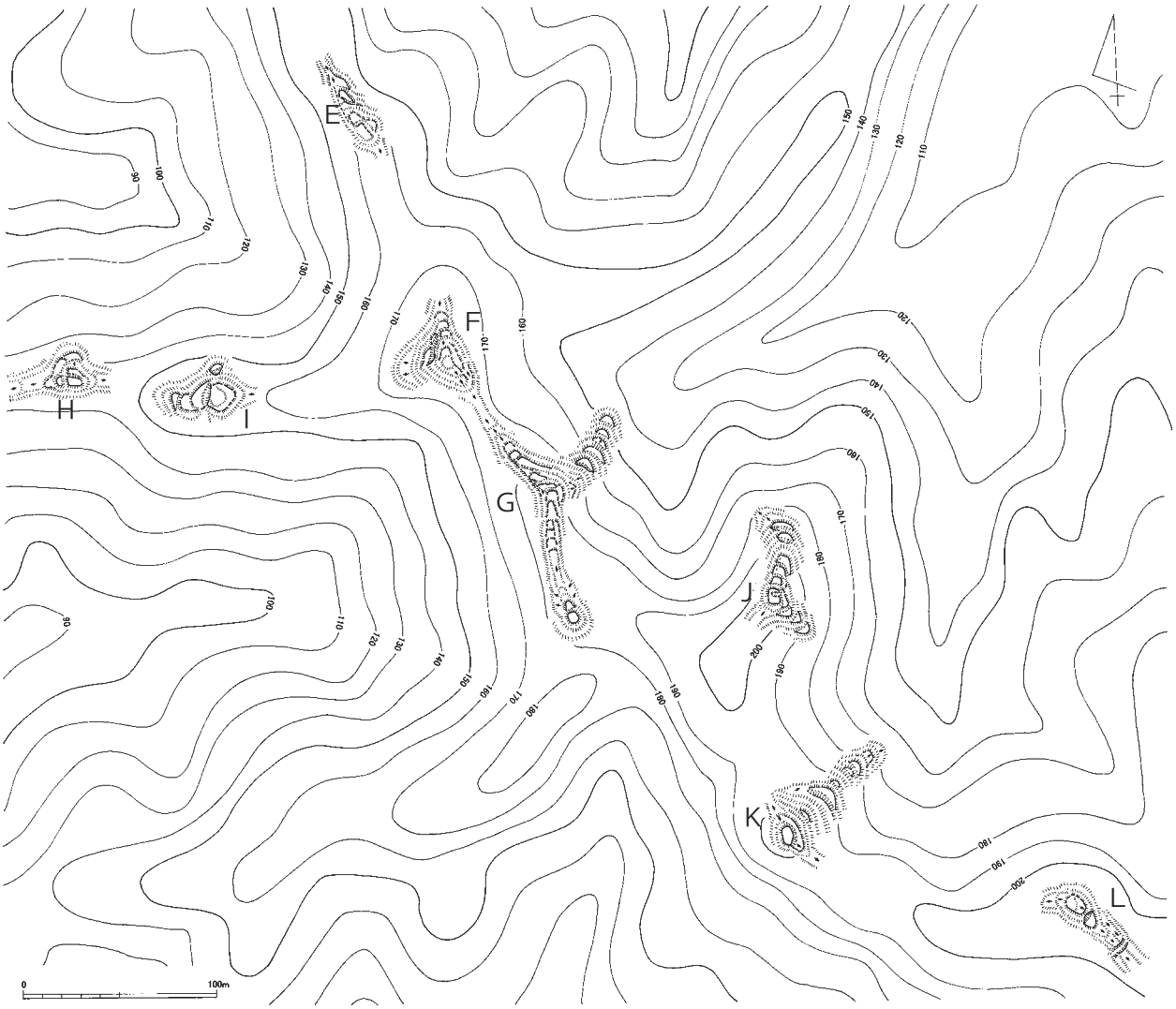

図５　扇山城縄張り図（上：A ～ D 地点・下：E ～ L 地点）（福岡県教育委員会 2017）

『筑前国続風土記』には「秋月の端城也。村民は修理殿城と云」とあるばかりだが、同書の「八木山村古戦場」の項にも、天正９年（1581）11月、戸次・高橋両軍が秋月領内に進攻したため、秋月方の「臼井、扇山、茶臼山、高の山、馬見などの城代共」が合戦に及んだことが記されており、扇山城が、前述の茶臼山城と同じく穂波郡における秋月方の城として取り立てられていたことが窺われる。

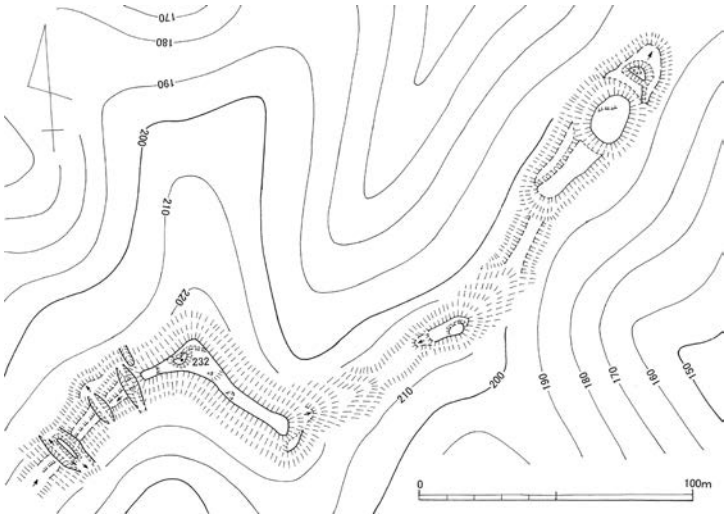

図７　向山城縄張り図（福岡県教育委員会2014）

③一ノ谷城（図６）

扇山城から谷を隔てた東側の標高198mの山稜上に位置する。従来は明確な城郭遺構が確認されていなかったが、2014年の福岡県教育委員会の調査によって、遺構が確認され、一ノ谷城と推定されている（福岡県教育委員会2014）。城は、飯塚市平塚集落の南の山稜上にあり、頂部を中心に小規模な曲輪群が置かれる程度であるが、南側の尾根上には、堀切が２本構築されており、城郭の防御遺構とみることができる。『筑前国続風土記附録』には「（平塚）村の南三町斗にあり。城主詳ならす。本丸二ノ丸及堀切の跡、所々に残れり」と記されており、城主などは伝わっていない。

④向山城（図７）

茶臼山城から山口川を挟んだ左岸、馬敷集落の南東側に連なる丘陵上に位置する。従来、城郭の所在や遺構は不明確であったが、『福岡県地理全誌』の「村ノ東ニアリ」の記載に基づき、踏査したところ、発見・報告に至ったものである（福岡県教育委員会2014）。城は標高232mの頂部を中心に、その東西に延びる尾根上に縄張りは展開する。主郭の東側には４本の堀切を構築して西側からの敵襲に厳重に備える一方で、東側の尾根筋は曲輪が散在的で、東北隅に堀切１本を設ける程度となっている。東西200mを越える城域の規模を有している。『筑前国続風土記附録』には「むかい山の古城」として「城主しれす。東北ハ短く、西南になかし」と記される。

⑤高石山城（図８）

前述の茶臼山城から南の大根地山への稜線上を800mほど進んだ標高480mの頂部を中心に縄張りは展開する（高石山城１）。山の頂部には南北50mほどの曲輪群を置き、その北側と南側の尾根上に堀切をそれぞれ１本と２本、構築する。さらに山の頂部から南東側へ尾根を下った標高408mの箇所にも城郭遺構が確認できる（高石山城２）。非常に小規模な曲輪群に加え、堀切などが構築されている。『筑前国続風土記』の「内野村古城址」には、「此村の上に高石の城とて古城址あり。城主の名しれす」とあるが、『福岡県地理全誌』には「秋月氏ノ端城ト云。城主シレス」とあり、秋月氏の出城と伝わっていたことが想定される。

⑥桑木（くわのき）城（図９）

高石山城から南の大根地山へ向かう稜線の途中には、「スダワラ越」といい、米ノ山の麓の山口の集落から穂波川流域の近世宿場町・内野へと通じる峠道をまたぐが、さらに南の大根地山方面へ進んだ標高500m地点前後に、桑木城は位置する。桑木城は、長らく所在などの詳細が不明な城であったが、2023年に発見・報告がなされ、その内容が明らかとされている（岡寺2023）。

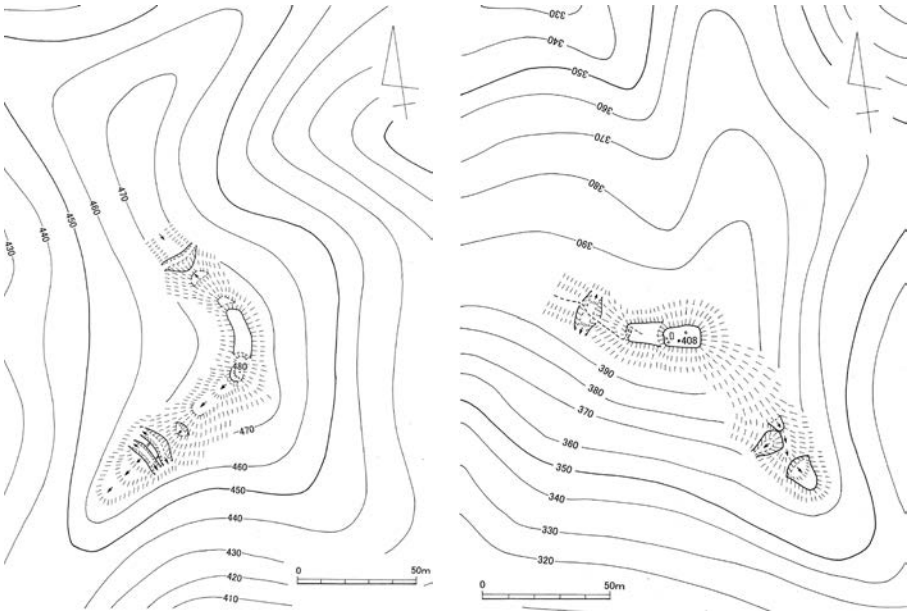

図８　高石山城縄張り図（左：１地点・右：２地点）（福岡県教育委員会2014）

城は、稜線上に３地点に分かれて置かれている。最高所にあるＡ地点は、筑紫野市と飯塚市との境にも近い。南北約50mにも満たない小規模であるが、主郭には逆Ｌ字形に土塁が巡り（図中ａ）、北側にも土塁遺構ｂが確認できる。Ａ地点から北へ下っていくとＢ地点、Ｃ地点となるが、Ｂ地点は標高約500mの頂部に、不明瞭な平坦地形の一辺約20mの曲輪を置き、その東、西、南側に遺構を確認することができる。西側から南側にかけての尾根上にはそれぞれ１本ずつ計３本の堀切（図中ｄ～ｆ）が設けられ、東側の曲輪には台状に造成された土壇に直径５ｍ、深さ１ｍほどのくぼみを確認することができる（図中ｃ）。狼煙台のような遺構だろうか。Ｃ地点へと続く尾根筋には堀切は確認できない。Ｃ地点は、標高約510mの尾根の先端部に、一辺10m弱の不明瞭な平坦面の曲輪を置き、その南側と西側を中心に小曲輪群を階段状に配している。堀切などの遺構は確認できない。前述の『筑前国続風土記』「内野村古城址」には高石山城の記載に続いて、「又町はづれの西の山に城址あり。桑の木の城と云。是又城主の名詳ならず」とあり、城主は伝わってはいない。

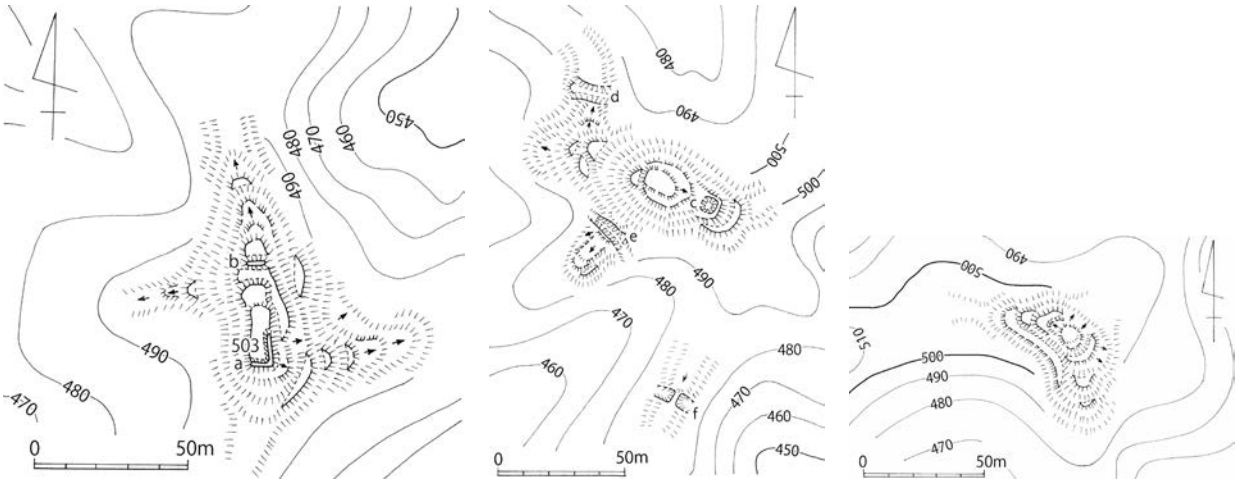

図９　桑木城縄張り図（左：Ａ地点・中：Ｂ地点・右：Ｃ地点）

３．米ノ山城周辺城館が示す米ノ山合戦

（１）米ノ山城と周辺城館の位置とその意味

以上、米ノ山城およびその周辺に位置する城館について、その概要を確認した。米ノ山城は、大友方の高橋紹運の出城ではあるものの、その位置は隣接する穂波郡である。穂波郡は秋月方の領域であり、周辺に位置する城館は、城主不明とするものを除けば、すべて秋月氏に関する城館として伝承されている。つまり、米ノ山城は敵対する秋月方の領域の中にあり、高橋氏の領域から橋頭堡のように飛び出した位置に築かれており、秋月方から見れば、穂波郡を支配するうえで厄介な存在ともいえるのではないだろうか。天正11年に秋月方が米ノ山城を切望したのも、穂波郡を安定的に押さえるための戦略だと考えることができるだろう。

一方、米ノ山城周辺の城館を見ると、米ノ山城と山口川を挟んだ大根地山から北へ派生する稜線上に、桑木城、高石山城、茶臼山城が連なるように配置されている。これは単に３箇所の砦が置かれたというだけではなく、一つの城の中に２～３地区に分かれるように曲輪群が散在し、あたかも米ノ山城に対して、防衛線を張るような配置であることがわかる。さらに言えば、茶臼山城の西には、山口川をはさんで向山城があるが、城の縄張りを見ると米ノ山城がある西側に向けて堀切が四本も構築されており、あたかも米ノ山や三郡山といった高橋方の御笠郡からの攻撃に対する備えとみることができる。「むかい山」という名も、米ノ山城に対抗して構築された「向城（付城）」を意味しているかのようで示唆的である。

さらに茶臼山城から東には、穂波川を挟んだ丘陵上に、扇山城や一ノ谷城が構築されている。特に扇山城は従来考えられていた範囲を越えて広がっており、12か所にもわたり曲輪群が構築されている。さらに堀切などの防御遺構に薄く、兵の駐屯を主な機能とも考えられる小規模な平坦面群が散在している状況を見ることができる。城域全体に兵を駐屯させれば、それなりの数を収容することができたものと考えられる。

これら米ノ山城周辺の城館は、城主不明のものも存在するが、茶臼山城、扇山城、高石山城など、主要な城館が秋月氏の端城として伝承されていることから考えても、これらのほとんどが秋月氏にかかわる城館として想定できるだろうし、そのように考えた場合、米ノ山城に対して、秋月氏が穂波郡内に防衛網を張っていたこととみることができる。

つまりは、米ノ山城に対して、穂波郡側に相対するように桑木城―高石山城―茶臼山城―向山城が連携して防衛網を張ることで、高橋氏の穂波郡内への侵攻を阻み、さらには茶臼山城―扇山城―一ノ谷城とが連携して、その背後を固めているのがわかる。

以上のように、米ノ山城周辺の城館は、米ノ山城を築くことで穂波郡方面へ勢力拡張を図る高橋氏に対し、それを阻止するために秋月氏によって構築された防衛網と考えることができる。

（２）米ノ山合戦の推移と城館群の構築

ここで米ノ山合戦の経過に立ち返り、それぞれの城館の位置付けを考えてみたい。合戦では当初、秋月方本隊が米ノ山城に攻めかかろうとしたところ、高橋紹運が「山之手」から防戦に入り、秋月氏を撃退している。イエズス会の年報からは、秋月方を欺き油断させたとはいえ、紹運はどのように防戦に入ったのであろうか。米ノ山城の位置を見ると、高橋方の拠点・宝満城のある宝満山山頂から稜線伝いに北東へ延びる三郡山から見下ろすことのできる位置にあり、三郡山からは尾根伝いに竹の尾山を介して、山麓を通ることなく米ノ山城へ到達することができる。三郡山の近くの頭巾山には、宝満城の出城と想定される頭巾山城（障子岳城）があるため、米ノ山城は穂波郡にありながら、高橋方の拠点である宝満城とは緊密な位置関係にあるといえる。おそらく高橋紹運が

駆けつけた「山之手」とは三郡山・竹の尾山方面からの尾根伝いのルートではないかと考えられる。つまり、紹運が即応できたのは、欺瞞作戦だったとはいえ米ノ山城の位置が高橋方にとって駆けつけやすい場所にあったからと考えることができるだろう。

では、秋月氏が築いたとみられる米ノ山城周辺の城館網は、どの段階のものであろうか。イエズス会年報では、合戦が起こった城は「秋月が非常に希望した城」であったとしている。米ノ山城が秋月領内に橋頭堡のように飛び出した場所に築かれたことを考えれば、ここを秋月方にしてしまえば、穂波郡が高橋方から攻め込まれる危険性も限りなくなくなることから、「秋月が非常に希望した一城」であった理由も首肯できるだろう。逆に言えば、秋月氏にとって高橋方の米ノ山城は、「目の上のたんこぶ」であり、穂波郡を脅かす「脅威」でもあったといえる。

米ノ山城周辺の城館網は、そのような秋月氏の脅威であった米ノ山城に対応するための処置として合戦前から構築されたものだったと考えらえる。これらいずれの城も単純な構造を呈しているのは、城で敵を迎え撃つことを想定しているのではなく、米ノ山と向かい合った稜線上から、あたかも監視カメラのように米ノ山城の高橋軍の動きを逐一監視して、米ノ山城から穂波方面へ至る街道や峠道を扼することが主目的であったからではないだろうか。

米ノ山合戦の後は、戸次・高橋方と秋月方との穂波郡を巡る争いは起こることはなかったが、おそらく米ノ山城を巡る両者の緊張関係は継続し、周辺城館群も米ノ山城の動きを牽制するために機能したものと考えられる。

おわりに

本稿では、天正11年に勃発した米ノ山合戦について、史料からの読み取りを行ったうえで、米ノ山城および周辺城館の位置付けについて考察を行った。従来、米ノ山城合戦は、秋月方の策謀によって起こったものであったと考えられてきたが、『イエズス会日本年報』の書簡の読み取りから、戸次・高橋方が秋月方に仕掛けた欺瞞作戦で、その策に引っ掛かった結果、秋月方が大敗した可能性を指摘した。これは高橋方が穂波郡の前線拠点として米ノ山城を保有していたものの、それ以外の領域はほぼ秋月方のものとなっており(4)、それ以上に攻め込むことができなかった一方で、筑前西部や筑後などの周辺への出兵が相次ぐような情勢から、どうしても真向から対処する余裕のない秋月方の勢力を削いでおきたかったという意図が見え隠れする。一方で、策謀にまんまと乗ってしまった秋月方も、穂波郡を押さえる上で、米ノ山城がどうしても目障りであり、「非常に希望した城」だった。米ノ山城に相対する城館群は、米ノ山城からの攻撃を是が非でも抑えるための防衛ラインとしての役割を果たすために構築されたものだと理解することができるだろう。

今回取り上げた飯塚市南西部の旧穂波郡地域の城館は、福岡県教育委員会の調査が及ぶまでは、存在が知られるものの、ほとんど調査研究の対象とならなかった地域であり、地域全体の城館の様相が明らかとなった現状でようやく検討の俎上にあげることができた。

本稿では、城郭遺構の調査の成果をどのように歴史的に意義付けられるのかを考えつつ、検討を進めたが、文献史料を再精査する中で図らずも米ノ山合戦の位置付けを新たにすることができた。そしてさらに、これまで詳細不明だった城郭遺構の歴史的位置づけを行うこともできた。

今後も文献史料が示す歴史的事象との整合性を検討しつつ、現地に残された城郭遺構の歴史的性格や意義を考えていきたいと思う。

＜追記＞本稿をなすにあたり、藤野正人氏（北部九州中近世城郭研究会）にはご助言をいただいた。記して感謝します。

【註】

（１）以下の原文翻刻は、竹内・川添（2000）による。
（２）以下の原文翻刻は、竹内・川添（2000）による。
（３）以下の原文翻刻は、竹内・川添（2000）による。
（４）江戸時代の地誌では飯塚市津原の宮山城が、『筑前國続風土記』に「宝満の城主高橋氏の家臣岡松八郎左衛門と云者、是に住せしと云」とあるが、現地遺構は調査されることなく消滅し、一次史料への記載もないため、不明と言わざるを得ない。

【参考文献】

飯塚市教育委員会2013『米ノ山城跡２』
岡寺　良 2006「太宰府・岩屋城の研究（上）―城郭構造（縄張り）からの検討―」『九州歴史資料館研究論集』31　九州歴史資料館（のち岡寺2020所収）
岡寺　良 2007「太宰府・岩屋城の研究（下）―城絵図からの検討―」『九州歴史資料館研究論集』32　九州歴史資料館（のち岡寺2020所収）
岡寺　良 2020『戦国期北部九州の城郭構造』吉川弘文館
岡寺　良 2023「新たに確認された福岡県内の中世城郭遺構について（２）―飯塚市桑木（くわのき）城跡―」『北部九州中近世城郭研究会情報紙』44　北部九州中近世城郭研究会
川添昭二 2003『中世九州の政治・文化史』海鳥社
木島孝之 2022『天正十四年 島津氏北進時の岩屋城・宝満城・立花山城合戦を再考する』木島孝之発行
竹内理三・川添昭二編 2000『大宰府・太宰府天満宮史料』巻十六　太宰府天満宮
筑穂町教育委員会 1988『米ノ山城跡』
中西義昌 1998「筑前岩屋城の縄張り構造―縄張り研究からみた戦国誌研究の展望―」『福岡地方史研究』第36号　福岡地方史研究会
新名一仁 2017『島津四兄弟の九州統一戦』星海社
福岡県教育委員会 2014『福岡県の中近世城館跡』Ⅰ―筑前地域編１―
福岡県教育委員会 2017『福岡県の中近世城館跡』Ⅳ―筑後地域・総括編―

（おかでら・りょう　立命館大学文学部准教授）